

夏みかん物語



明治時代に「萩夏蜜柑輸出仲買商組合」が使用したレットルを加工しています。
このレットルを印刷した紙に包んで夏みかんを売っていました。

萩・夏みかん再生地域協議会

夏みかんの始まり

夏みかんの最初の本は、長門市青海島の大日比（オオヒビ）という所にあります。

今からおよそ300年前に大日比の海岸に流れ着いた果実の種を、西本チョウが蒔いて育てたのが始まりとされています。（この原木は昭和2年に国の「史跡および天然記念物」に指定されています。）

実がなるようになると、その実を宇樹橘（ウジュキツ）、ばけもの、ばけだいだいなどと呼んでいたようです。

萩には、およそ200年前に榑崎十郎兵衛（江向）が大日比の知人から数個の実を送られ種を蒔いたという記録や、熊谷家（今魚店）で料理に使われていた記録が残っています。

1833年に杉彦右衛門（江向）が、大日比から持ち帰った2本の苗のうちの1本を、児玉惣兵衛（堀内）にわけました。1848年児玉家の木に実がなり、このことから児玉蜜柑と呼ばれ、収穫期が分からないためユズの代わりや観賞用としていたようです。

その後、児玉の子、正介がたまたま夏に食べた実が美味しかったので、13代藩主毛利敬親公に献上したことから、御前九年母（ゴゼンクネンボ）や夏九年母（ナツクネンボ）と呼ばれるようになりました。

夏みかんは江戸時代の終わり頃には、萩の武士や大きな商人の家などに植えられていたそうです。しかし、売ってお金を儲けるためではなく、自家消費のためだったようです。吉田松陰の松下村塾の周りにも夏みかんが植えられていたことが古い図面に記されていることから、ひょっとしたら松陰先生も夏みかんを食べていたかもしれません。

夏みかんの本格栽培の始まり

夏みかんの栽培が広まって、それを売ってお金を儲けるようになるのは、明治時代のことです。小幡高政という人が初めて夏みかんの栽培を広めました。

小幡高政は明治維新後、小倉県（現在：福岡県）の権令（現在：県知事）となりましたが、明治9年に萩に帰り、平安古に住みました。

この頃、藩からの禄を失い困窮した生活を送る武士を救うため、「耐久社」という会社をつくり、夏みかんの苗木を武士に配りました。

およそ10年後には、夏みかんの木は萩の空き地を埋め尽くすまで育ち、夏みかんは萩の特産物となり、山口県内のみならず北九州・広島・大阪、さらに東京へも出荷されるようになりました。

小幡高政の住んでいた家は、その後、総理大臣になった田中義一の別邸になり、平成14年に修復され、周辺の夏みかん畑をかんきつ公園として整備しました。ここには小幡高政が、この場所で夏みかんの栽培を始めたことを後世に伝えるために、明治23年に建てた石碑があります。この石碑には次のようなことが記されています。

「夏みかんの畠は、明治9年にこの場所で初めて開かれました。その後、木が増えて14年後の今ではこの畠の夏みかんの木は500本余りになりました。最初は私が率先して、夏みかんの栽培を広めました。その当時、萩で夏みかんを作るものはほとんどいませんでした。人は私が夏みかんを植えるのを疑いの目で見たり、あざ笑ったりしていま

した。しかし、今日、夏みかんの栽培が盛んになるにつれて、疑いの目で見たりあざ笑っていた人々も、少しの空き地があれば、みんな夏みかんを植えるようになりました。こうして夏みかんは萩の名産となり、全国の多くの人々に大変好まれ、評判の果実となりました。」

夏みかんの名の由来

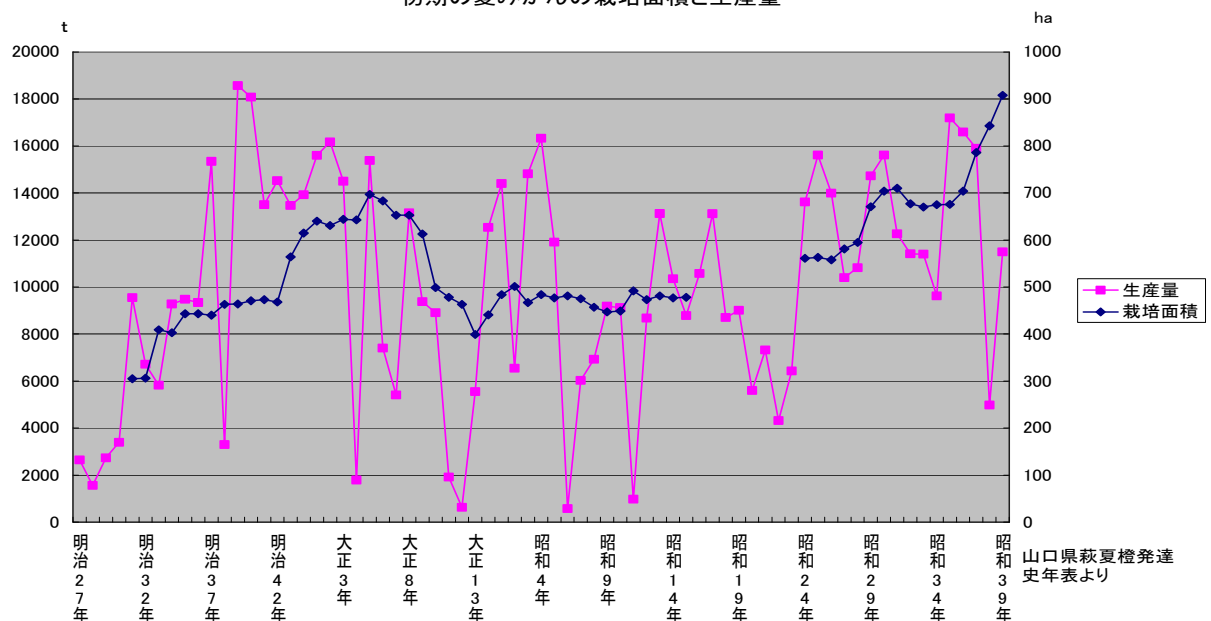
夏みかんの学名は *Citrus natudaidai* HAYATA といいます。また、植物分類では ミカン科 ミカン亜科 ミカン属 ナツダイダイ といいます。萩では当初、橙（ダイダイ）又は夏橙（ナツダイダイ）と呼んでいましたが、明治17年夏みかんを大阪方面に出荷するとき大阪の仲買商人から「夏橙」の名称を「夏蜜柑」に変えるようすすめられ、以来商品名として命名された夏蜜柑が普及して、現在では夏みかんの名が定着しました。その改名の理由は、夏みかんの実を収穫しなければ、前年の実と今年の実が木になることから「夏代々」とも記しており、「代々」は「ヨヨ」とも読め、近畿地方では中風のことを「ヨイヨイ」と称して、夏代々を食べると中風になるといわれ、縁起が悪いので改名したのだそうです。

初期の販売出荷

始めは少数の人のみが夏みかんの木を植えていましたが、夏みかんが高く売れることがわかると多くの人々が夏みかんを作り始めました。明治27年には山口県全体の夏みかん生産量の内90%以上を萩で作っています。（全国でも生産量第1位でした。）

その後も萩は大正時代まで夏みかんの生産量が全国第1位でしたが、夏みかんを作れば儲かることが全国に知れ渡ると、ほかの地域でも夏みかんを作り始めたため、以前ほど儲からなくなり、だんだんと栽培面積が減っていきました。当時の夏みかんを作る人の大きな悩みは、寒い冬が来ると夏みかんが寒害に受け（中身がスカスカになる。）生産量が安定しなかったことです。

初期の夏みかんの栽培面積と生産量

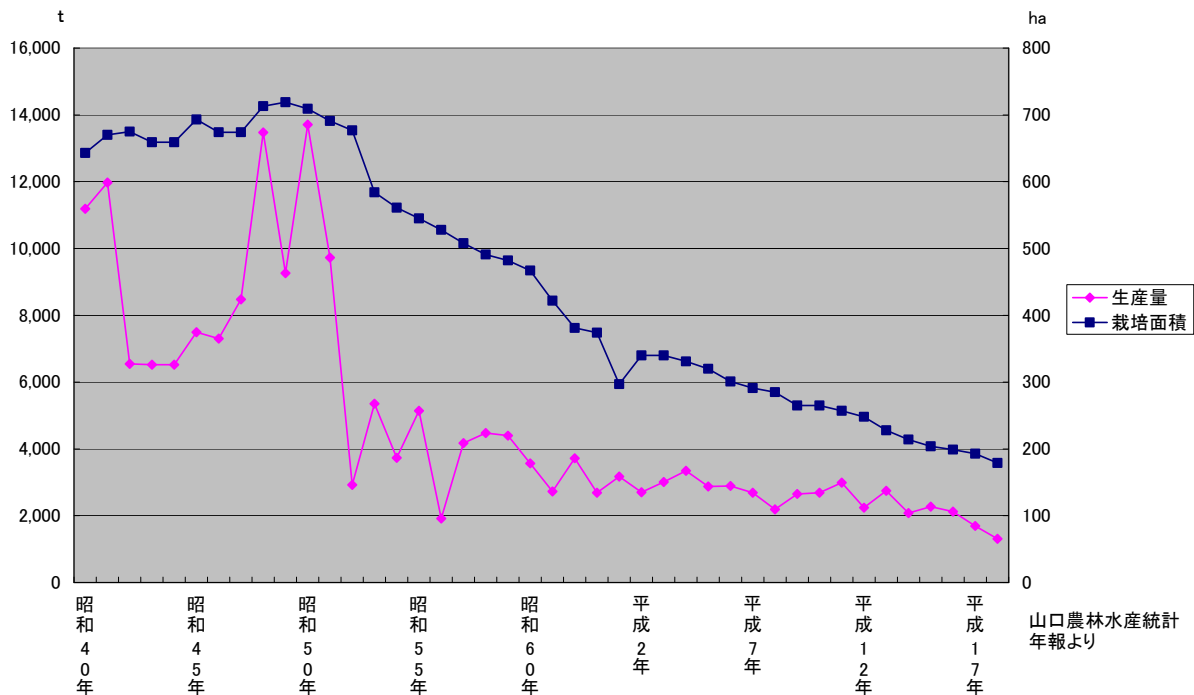


山口県萩夏橙発達史年表より

第2次世界大戦後の販売出荷

戦前に低迷していた夏みかん栽培は、国民のぜいたく志向の高まりで再び生産が増加しました。特に昭和40年代に大規模な園地開発や寒害を防ぐ貯蔵法の開発などで夏みかん生産のピークを迎えました。しかしながら、昭和45年のグレープフルーツの自由化を境に従来の夏みかんの価格が低迷するようになり、これまで夏みかんを作ってきた人も甘夏みかん・八朔・ネーブルフルーツ等に品種を更新してきましたが、輸入果実の氾濫や消費者に好まれる（甘く、食べやすい）新品種柑きつの登場などで産地が徐々に縮小してきています。

近年の生産量と栽培面積



夏みかん産地再生への取組み

萩は全国的な観光都市として知られ、「夏みかんと土塀」のイメージが浮かぶほど夏みかんは萩を象徴する果実です。

萩は夏みかんを作るには適していますが、新品種柑きつを作るのには適していません。

従来の夏みかんはほとんど甘夏みかんに変わっています。夏みかんは全国で見ても萩でほんの少ししか作っていないため全滅寸前です。夏みかんを作る人が努力を重ねてきましたが、作る人の努力だけでは産地の再生は難しい状況です。

そこで、お役所や商工業者の方、観光業者の方が夏みかんを作る人と一緒になって再生に取り組むことになり、平成21年3月に萩・夏みかん再生地域協議会を設立し活動を始めました。

また、4月に夏みかん再生への象徴的な施設として萩夏みかんセンターを造りました。萩夏みかんセンターは、夏みかんを作る人の研修の場と夏みかんに関する情報を発信する役割をもっています。現在、新しく夏みかんを作りたい人2名と、作る技術を高めた人39名が研修しています。

萩夏みかんセンターの概要

1. 土地 32,450 m²
2. 土地利用
研修ほ場 20,700 m²
施設用地（通路部分を含む） 11,750 m²
3. 建物
本館棟外 12施設 958.24 m²
うち本館 309.66 m²
なお、平成21年度事業で研修棟1棟（130 m²）整備する予定
4. 職員数
所長 1名、職員1名、指導員1名、臨時職員2名
5. 研修生 新規就農希望者 2名（51歳・35歳）
長期講習受講生 39名
6. 運営費 4,419千円

7. センターの役割

担い手対策として定年帰農者等を対象とした栽培技術講習会を定期的を開催するとともに新規就農希望者を研修生に向かえ、2年間の研修後就農できる体制づくりをサポートします。また、流通対策として「萩・夏みかん再生地域協議会」が観光都市萩の知名度を活用した消費宣伝活動を行います。ブランド力強化対策としては、「萩夏みかんセンター」を夏みかんの情報発信拠点とし、相談窓口の設置やホームページを開設します。なお、「萩夏みかんセンター」は約2haの樹園地を抱えており、体験型観光のツールとしての活用も検討していきます。

おわりに

再生への努力を始めたばかりですが、夏みかんの生い立ちから現在までの歩いた路にはドラマがあります。こんな果実が他にあるでしょうか。その時々々の要請に翻弄され、その存在が大きくなったり小さくなったり、少しかわいそうでもある可愛らしいニキビ面の果実です。

そして、今年も裏切らず香り高い白い花を咲かせました。